

令和2年度 第10期ふくまる教志塾スタート

「池田市の教員をめざす学生や社会人を対象に、児童生徒支援研修（現場実習）及びセミナーを通じて、教師という職業をめざす志を確かなものにする」とともに、人間としての成長、教師としての識見及び指導力・授業力の向上を図る」ことを目的に、平成23年度にスタートした「ふくまる教志塾」。節目である10年目を迎えた今年度は、予想だにできなかった新型コロナウイルス感染症の影響から、入塾説明会も大学へ出向いての説明会も全て中止となりましたが、それでも4名の聴講生を含む19名の応募があり、去る6月12日（金）に、例年より約2ヶ月遅れの開塾式の開催となりました。

.....

第1回「ふくまる夢たまごセミナー（開塾式）」

日時 6月12日（金）18：00～20：00

場所 池田市庁舎7階大会議室

内容 ①開塾の挨拶……池田市教育委員会 教育部次長 小林弘典

②記念講演

演題 教師の仕事は「寛容さ」と「覚悟」でできている！？

講師 鎌田 富夫 先生（元 池田市立池田小学校長）

③ふくまる教志塾概要説明

④閉会

冒頭、小林教育部次長から「今年度、みなさん19名をふくまる教志塾10期生として迎えました。本来であれば、4月にスタートを切ろうということでしたが、新型コロナウイルス感染症の関係で、学校現場も現在は、分散登校という形になっており、ようやく来週からクラス全員がそろってのスタートとなります。私たちも初めての経験であり、「学校へ行って生活しているのが当たり前、先生たち



は子どもたちに授業をして、一緒に遊んで生活するのが当たり前」と思っていたことが当たり前でなかったときに、一体、教育とはどうあるべきなのかということのを改めて考えさせられました。みなさんも、そういうことも含めていろいろ学んでくださることを願っています。」とのご挨拶がありました。

記念講演の講師、鎌田富夫先生は、昭和 51 年に池田小学校に赴任、平成 9 年には同校教頭、その後、池田市教育委員会事務局でご活躍され、平成 19 年からは同校の校長として退職までの 6 年間、「教育はロマン」「いきいきのびのびひとりひとりが主役」をモットーに、学校づくり、人づくりを行われました。退職後も、「ふくまる教志塾」セミナーアドバイザーとして、数多くの塾生の養成にご尽力いただき、現在は、池田市立秦野小学校でお力添えをいただいております。



講演では、「教師の仕事は「寛容さ」と「覚悟」でできている！？ — 教師をめざすみなさんと考えたいこと —」と題し、豊かな経験と様々な資料をもとにお話をいただきました。



お話の流れは、以下のとおりでした。(鎌田先生のレジュメより)

1. はじめに

<座右の銘>

- ・「疲れたら休め 限りない明日があるから」
- ・「教師ほど犯罪的な仕事はない」ということ

2. 教育は「遊び」の延長線上にある

- (1) 教育はアナログである
- (2) 子ども理解は教師の「寛容な心」から
- (3) 教育を「狭育」にしないために

3. 教師の「覚悟」

- (1) 「それを覚悟で先生になったんでしょう？」
- (2) 「おれ、先生のが嫌いでした。」
- (3) 「先生になって幸せーヨ！」



4. 教師の仕事と心構え

(1) 教師：五つの仕事

- ①授業
- ②学級（教科外）活動
- ③校務分掌
- ④研修
- ⑤保護者対応

(2) 教師：五つのワーク

- ①ヘッド
- ②ハンド
- ③フット
- ④チーム
- ⑤ネット

※ラグビーの「5つの精神」

- ①品位
- ②情熱
- ③結束
- ④規律
- ⑤尊重

5. 「責任逃れの教育」からの脱却を

6. 「教育はAI(IT)なり」？<「教育は人なり」？

- (1) 「教育は人育てなり」
- (2) 「教師が最大の教育環境」という自覚を

7. その他

〈付録〉

こんな教師は嫌われる……？

(1) 「成績優秀」なままでいる教師

- ・子どもの「分からない」が分からない

(明るいところからは明るいところしか見えない。暗いところからはすべてが見える。)

(2) 「真面目」なだけの教師

- ・人間的魅力がないと子どもはついてこない
- ・子どもは教師を好きになれば、学校も勉強も好きになる

(3) 「ただ優しく、甘い」だけの教師

- ・「叱らない」「あまい」だけでは愛情でも指導でもない
- ・優しくてもおざなりな教師は嫌われる



厳しい教師は必ずしも嫌いではない

(4) 「暗い」教師

- ・教師は明るく振る舞う努力を

(5) 「良い授業」を勘違いしている教師

- ・教師が活躍する授業か？ 子どもが活躍する授業か？
- ・子どもが自分の考えや意見を言えるように仕向ける授業を

ダメな子もかわいいと思えるか。そう思えない人は教師に向いていないかもしれない。「今はダメでも将来きっとよくなる。」「将来、自立して生きていけるようになってくれればいいな。」こんな思いが体から強く感じられるような教師をめざしてほしい。

<塾生の感想より>

… 教育、興育、驚育、狭育、狂育、漢字には様々な意味がありますが、組み合わせや解釈の仕方など、人それぞれなので、自分なりの意味を考えたいと思いました。

… 「子どもそれぞれの個性・性質に耳をかたむけ、聞き、その子が一番輝く場所をともに探す」ということ、これこそ教師の仕事であり、すべきことだと思った。

… 樹木希林さんの言葉で、「日陰だからきれいに咲く花がある」という部分が、クラス全員が同じことをするということが良い授業ではなく、一人ひとりにあった授業ややり方を考え、子どもが学びやすい環境を整えることの大切さを感じました。

… 教師という仕事は決して楽しいだけの仕事ではなく、時に子どものことで悩んだり傷つくこともあるということを改めて理解することができました。子ども一人

ひとり個性があり、全ての子どもが楽しく感じたりするわけではないので、一人ひとりに寄り添いながら理解できるように努力することが大切だと思いました。

… 鎌田先生は、身近にある教具となりうるものに対して敏感にアンテナを張っていると強く感じた。私も教材研究において、こういった姿勢を忘れずに頑張っていきたいと思う。

開塾式直後の緊張が解けないうちに始まった記念講演でしたが、塾生のみなさんは、真剣に聞き入っていました。

鎌田先生がお話くださった一部を紹介します。

● はじめに ～CM「ガリガリ君」値上げ～

2016年4月1日と2日限定で流れたCMです。ガリガリ君が60円から70円に10円の値上のために作ったわけですが、普通は、値上げをするというと反発があるが、CMは好評で、逆に「いいじゃないですか」「それだけ一生懸命やって下さっているんだから」



という声があった。赤城乳業の社長とその後ろに従業員が100人ほど立ってお辞儀をしている。バックに流れているのは、国会答弁のように値上げはしませんといったところから、日を迫うごとに値上げに踏み

切ろうという、今から50年近く前にできた高田渡という人の曲です。

今から私がお話したいことはこのことと大いに関係しますし、この中に教育の要素がいっぱいあると思っている。話



の主は、「教育は寛容さと覚悟でできている」ということで、一貫して言うつもりです。今のCMと「寛容さと覚悟」とを重ねて考えてもらえればと思う。

● 今年の年賀状から ～丈夫な頭とかしこい体～

今年の1月元旦に届くようにと私が出した年賀状です。

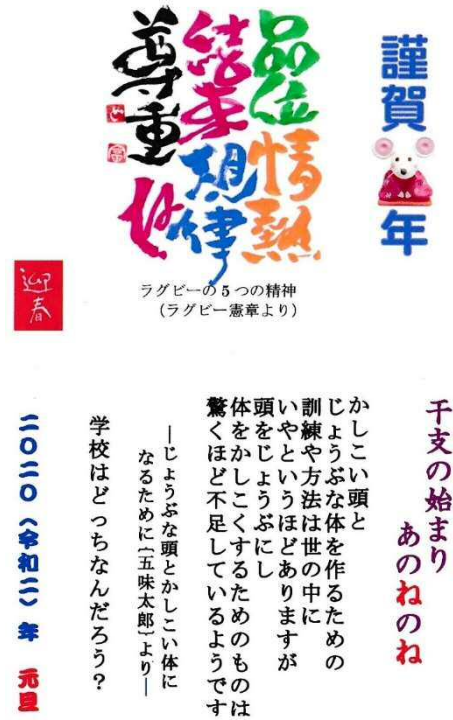
「干支のはじまりあのねのね」ということで、「賢い頭と丈夫な体を作るための訓練や方法は世の中にはイヤというほどありますが、頭を丈夫にし、体を賢くするためのものは驚くほど不足しているようです」。これは、五味太郎さんが「丈夫な頭とかしこい体になるために」という絵本の前書きから抜粋したものに、私が「学校はどっちなんだろう」と書いている。学校は賢い頭と丈夫な体を作るためのものになっているのか、それとも五味太郎さんが言う頭を丈夫にして体を賢くするためのものになっているのか。五味太郎さんは、このコロナ騒動の中で次のように言っている。『学校を元に戻す』と世の中でさかんに言われているが、元の学校はそんなによかったですか？ 子どもは不幸だったでしょ

というわけです。「何万人もの不登校の児童生徒がいる。そういった子がいるような学校に戻すのですか？」って言うのが五味さんなんです。何も今が大変だ、居心地が悪いというのではなく、「今こそ変えていくべき時ではないですか」とこの絵本を引用してこんなことを言っている。『丈夫な頭とかしこい体になるために』という本を書いたことがあるけれど、今みたいな時期こそ、自分で考える頭と敏感で時よりきちんとさぼれる体が必要であると思う。戦後ず～っと、丈夫な体、賢い頭と言われてきたけれど、それはつまり、働かされちゃう体。賢い頭というのはうまく世の中とつき合いすぎちゃう頭でキリがないし、いざというときに脆く弱い」と言っているわけである。…

● 学級通信のタイトルから

こんなんできた・休みの国から・はだかの王様・シャボン玉通信
シャボン玉・バク・なめくじだって・げんこつあめ・にぎりこぶし
ざぶとんの下・ハークション・あっ

20年間の教員生活で書いた学級通信のタイトルですが、普通にある名前じゃないということに気づいた人もいると思う。たとえば「なめくじだって」は、あまり気色のいいタイトルではないと思うが、「手の平を太陽に」という歌からきている。「～アメンボだって」の部分は実は「なめくじ」だった。作詞をしたやなせたかしさんは「誰がアメンボに変えたんや！」と怒っている。おそらくこの歌を学校に持ち込む際、教育関係が変えたのだろう。そういえばそうですね。「ミミズだっ～て♪ オケラだっ～て♪」とあって、突然きれいな「アメンボ」が出てくるのか。本当はナメクジだったということを知



って「なめくじだって」というタイトルをつけたという経緯がある。

「ざぶとんの下」というタイトルも、私が好きな山之口獺という詩人がいるが、「ざぶとんの上には楽がある。楽という上に座っている自分は…」というのがあるが、楽を支えている座布団の下に目を向けることはとっても大事なのではないかという思いからつけた。このように学級通信のタイトルは、自分自身の教育をこれから続けていく上での基本的な思いを名前にしたいというこだわりがあったから。…

「座布団」

山之口獺

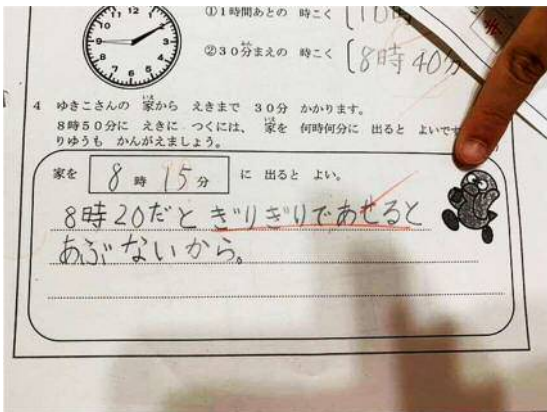
土の上には床がある
床の上には畳がある
畳の上にあるのが座布団で
その上にあるのが楽といふ
楽の上にはなんにもないのであらうか
どうぞおしきなさいとすすめられて
楽に坐ったさびしさよ
土の世界をはるかにみおろしてゐるやうに
住み馴れぬ世界がさびしいよ

● きょういく … 興育・驚育・共育・狭育

教育は遊びの延長線上にあると私は思っている。遊びというのはいろんな意味があるが、文化は遊びから始まっているのではないかと思う。教育もそうなんだろう。学問なんてものは一番の贅沢な遊びになったのかもしれない。遊びの延長線上ですから、学校で起こること、学校で行われる教育が面白いと子どもに思わせるのが、本当はいいんだろうなと思う。苦痛で遊んでいる子はいないと思うので、あの遊んでいる無邪気な子どもがそのまま勉強にと思う。理想かもしれないが。

Education という言葉が明治に入ってきました。これをどう訳すかということで、当時の大久保利通、福沢諭吉、森有礼が論争した。「教化」としたのは大久保、福沢は「発育」。間をとったのでしょう当時の文部大臣である森有礼は、教化の教と発育の育をとって「教育」とした。明治以来「教育」と書くようになってきているが、私は、興味を育てていく、あるいはおもしろみを育てていく「興育」であってほしいと思う。更に、驚きを育てていく、感動を育てていく、感動する場所である。それが教育の場ではないかと思っている。また、今こそ大事、もしかすると学校の一番の存在意義ではないかと思うのが「共育」。教育が「狭育」になっていないか。…

- 問題 「駅まで30分かかります。8時50分に駅に行くには、家を何時何分に出ればよいですか。理由も考えましょう。」

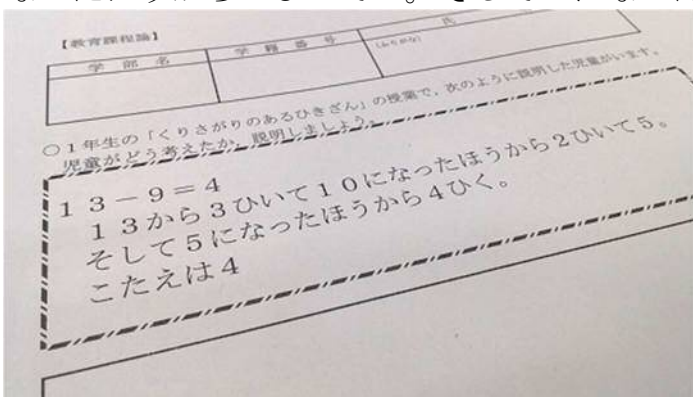


以前、TVのワイドショーで話題になったのですが、この問題にこの子は「8時15分に家をでればよい」と解答し、その理由を「8時20(分)だとギリギリであせるとあぶないから」と書いている。これ、×なんです。×ですか？みなさんが教師になってこの解答を見たらどうしますか？この問題は8時20分と答えさせたいわけですが、

「8時20分に出るとよい」と答えたら、理由は何と書きます？理由を書きなさいとなっているから、この子はしっかりと理由を書いている。8時20分と先生が答えてほしい答えを知っている。8時20分に30分を足すと8時50分とわかっている。よく、算数の生活化、算数を日常の生活に結びつけて考えましょうというのですが、しっかりと結びつけていますよね。これが教師の「寛容な心」なんだろうと思うのですが、どう思いますか？

- 問題 「 $13 - 9 = 4$ 」

4年前に東北大学の教育課程論の試験に「『 $13 - 9 = 4$ 13から3ひいて10になったほうから2ひいて5。そして5になったほうから4ひく。こたえは4』と子ども



が説明しました。こういう説明をした子どもの言葉足らずな部分も含めて説明しなさい。」という問題が出て、話題になった。

教科書では、「3から9は引けないから10と3に分け、10から9を引いて1。1と3で4」となっている。大人には素直に入ってくるが、子どもの頭には

そう素直に入ってこない。今みたいな入り方をして、今みたいな説明しかしないんです。だから教師は子どもの言っていることをどれだけ理解してやるかという努力が必要だと思うのです。だいたい言っていることがよくわからないから、「もう一度よく考えて」とか、「何のことかみんなわかった～？ わからないねー」というようになってしまう場

合が多い。先生は、切り捨てたとも悪いこととも思っていないが、答えた子どもは「何でわかってくれへんねやろー」と思っているかもしれない。私の言う「子ども理解は教師の寛容な心」というのは、どう理解しようかと考えようとする教師になってほしいという願いから。

● それを覚悟で先生になったんでしょ……？

これは、私が校長として経験したことです。3月のことでした。転校の挨拶に来られた保護者とその担任との話し合いの場に、教頭とともに立ち会った時のことです。

クラスの中ではゴンタで、常に担任から注意を受けている男の子がいました。授業中、指導に手を焼いた担任が、何とかしてほしいと校長室に駆け込んできたことがあります。すぐに教室に行って、「どうしたー？」と聞いても机に伏したままその子は何も言わず、不満に満ちたまなざしで担任をにらみつけます。私は、担任との関係がうまくいっていないことを察知しました。担任は、教室でトラブルがあるたびに家で何とかしてほしいと、頻繁に家庭に連絡を入れていました。お母さんは、そのたびに「すみません」と、素直に我が子の至らなさを詫び、担任に謝り続けてきた。そんな1年がすぎた。これまで、担任の言い分をそのまま聞き入れていたお母さんですけれども、転校を機にどうしても伝えなかったのでしょう、その場に校長と教頭の同席を望みました。そして、今まで心の底に押し込んでいたであろう思いの丈を目の前の担任に訥々と話し始めました。それまでず～っと「お世話になりました」「転校することになりました」「ありがとうございました」と言っていたのですが、最後に担任の顔を覗き込みながら、次のような言葉で締めくくりました。「先生は、うちの子に『傷つけられた』とよくおっしゃいましたね。うちの子が悪いのはよくわかっています。その通りだと思います。でも、子どもに傷つけられるのが教師の仕事じゃないんですか。それを覚悟で教師になったんでしょ？先生は、困ったことはすぐに親に言うことができますよね。反対に、先生は子どもの心を傷つけなかったですか？うちの子は傷ついてもうまく言えなかったんです。先生、わかりますか？」と言って、お母さんの目からぽろぽろっと大粒の涙が溢れていたのです。

担任は、このお母さんの思いをどこまで理解したんだろう。自分と男の子との関りをどの程度反省したんだろう。この時のお母さんの言葉をいつまでも心に留め、子どもや保護者の心に寄り添い受容できる教師になってほしいと思いました。

「子どもに傷つけられるのが先生の仕事でしょ、それを覚悟で先生になったんでしょ？」と、このお母さんは言われたのです。そうだと私は思いませんが、この時のお母さん

の気持ちは、ものすごくよくわかりました。みなさん、この覚悟はいりますよ。みんな、子どもに好かれる、誰からも好かれる教師になろうと頑張っているんですよね。それはそれで結構ですし、そうしてください。でも、嫌われることだってあるということを心に置いておいてください。そういったことを覚悟して教師になってほしいと思います。

他にも、そうごう・西部の広告「さ、ひっくり返そう」、白鶴 CM「俺、先生のこと嫌いでした。だから…」、樹木希林さんの「教師になって幸せ一っつヨ」、「安全第一」等々、お話してくださった内容は非常に多岐にわたっていましたが、帰結するところは、「寛容さと覚悟」。さて、みなさんにその思いの一端を知っていただくことができたでしょうか？